

徳田和夫氏所蔵『餅合戦状』翻刻

伊藤 慎吾

(本学教授)

『餅合戦状』(写一冊)は奥浄瑠璃の滑稽物「(黒白)餅合戦」と同一内容の小品である。毎半葉六行書きでわずかに五丁余りのものであるが、しかし、その資料的価値は大きい。「餅合戦」のテキストは、今日、近代以降に筆録したものに限られ、近世に遡るものがない。近世に既に語られていた事実は菅江真澄の紀行文等から認めることができるが、どのような詞章が語られていたのか、その詳細までは明らかでない。しかし、嘉永六年(一八五三)という、幕末とはいえ、近世期の写本が出て来たことは、近代以降に口述筆記や記憶を頼りとする筆録で確認される流動的なテキストの展開を考える上で大きな意味を持つであろう。ここに翻刻紹介する所以である¹⁾。

詳細は別稿に譲ることとして、ここでは簡単に梗概と書誌を記しておく。まず物語の展開は次のように示すことができる。

- 1 宝六元年薬缶の年四月半ば、囲炉裏ヶ城で白粉の餅と黒粉の餅との間で座敷論が起こったが、鍋島の執り成しでその場は収まった。
- 2 遺恨のある黒粉の餅は栗餅をはじめとする郎等八百万余騎を集め、囲炉裏ヶ城に押し寄せる。
- 3 一方、白粉の餅も正月元三の粽餅をはじめとする郎等五百万余騎を集める。
- 4 糠屋で寝ていた白粉の餅の郎等納豆小太郎糸髭が目覚まし、白箸兄弟を同伴して餅たちを絡め取り、六腹殿の門番に引き渡す。
- 5 餅は六原城に向かう途次、責め立てられ、山伏に扮して裏門の坪坂を指して落ちていった。

異類合戦物の特色の一つにそれぞれの軍勢の勢揃えを取り入れることがある²⁾。まず寄せ手の黒粉の餅の軍勢には次の餅がいる(訓

みは暫定)。

栗餅・稗餅・杵餅・檜実餅・薺餅・佐夜の中山飴で餅・西坂本の蕨餅・猿ヶ馬場の柏餅・蕎麦粥餅・焼餅・福取餅・小豆餅・尻餅・鎗餅・息子餅・むぐら餅・銭餅・金餅

栗餅以下、餅の種類が並んでいるが、佐夜(小夜)の中山飴で餅、西坂本(日坂)の蕨餅、猿ヶ馬場の柏餅はいずれも東海地方の名物として知られた餅菓子である。蕎麦粥餅、福取餅は東北地方特有の餅である。尻餅以下は言葉遊びとして「餅」を掛けた言葉である。

次に籠城側の白粉の餅の軍勢には次の餅がいる。

粽餅・弓矢の餅・菱切餅・薬師の餅・菖蒲餅・歯堅め餅・七夕餅・名月餅・菊の餅・恵比須講餅・油絞餅・祝切餅・ごし餅・田地餅・俵餅

粽餅以下、年中行事の餅が多い。油絞餅・ごし餅は東北地方特有の名称である。田地餅、俵餅は「持ち」に「餅」を掛けた言葉遊びである。

なお、これらのうち、蕎麦粥餅、福取餅、ごし餅は東北地方、特に三陸地域周辺の民俗と関わるものとして注目されるが、この点については別稿に譲る。

このように黒粉の餅、白粉の餅それぞれの軍勢がある程度カテゴリーによって分けられていることが読み取れる。ところが『餅合戦状』の中には白粉の餅の軍勢に一括され、黒粉の餅の勢揃えが設け

られていない事例も筆録されている³⁾。

注

- 1 なお、すでに伊藤慎吾「近世」近代前期の異類合戦物の文芸における嗜好品の受容」(『2022年度 公益財団法人たばこ総合研究センター 助成研究報告』二〇二三年)に簡単に紹介している。
- 2 伊藤慎吾「異類合戦物の表現」『擬人化と異類合戦の文芸史』三弥井書店、二〇一六年。
- 3 福田晃「早物語「雑具合戦」・「餅合戦記」(『伝承文学研究』六、一九六四年一二月、九六頁)、石井正巳「早物語「餅合戦」の伝承」(『学芸国語国文学』二〇、一九八五年三月、七四頁)の「鈴木幸龍師の伝承」など参照。

【略解題】

書型 仮綴、共紙表紙

寸法 たて二六・八cm×よこ一三・四cm

料紙 楮紙

外題 餅合戦状(左肩・直・墨書)

内題 餅合戦状(本文冒頭)

尾題 餅合戦状終

丁数 六丁

《翻刻》

餅合戦状

扱も其後囲爐裏の城に大きなる

問答を一つ出来に覺其故尋ぬるに

頃は寶六元年葉鐘の年にて座します

月を申せは卯月半頃白粉の餅と黒

粉の餅は座敷論をそ成に覺黒粉

の餅は焙燠を横たへて横座の真中に

居りしかは白粉の餅の申様そちか黒き

身分として高座をするは何事そや不調法

千万早速罷下れと匍りけるやあいかにと

責立ければ黒粉真黒に成て腹を立黒

き白きは人間の業先祖を糺せは同し

澤田の姫鶴餅につくき奴ばら高言哉と

互につつ立組打せんとせし折柄鍵に懸

りし鍋島はやあ上を恐れす無礼者

吟味は必定也追て下知なすへし此場所

どつと引取へしと仰覺然るに何れも宿所

「前表紙

「一オ

「一ウ

「二オ

「二ウ

「三オ

「三ウ

に社は引取覺去程に互に遺恨を含迎
も一戦して勝負を決せんと先黒粉の
餅の郎等に粟餅稗餅柜餅檜實

餅の先陣にて苦々敷も薺餅佐夜の

中山あめて餅西坂本の蕨餅猿ヶ馬場の

柏餅は後陣の備也續て御本陣の兵士

には一参々に煉てかゝりし蕎麦粥餅

胸を焦すは焼餅夫婦喧嘩も焼餅

正月農始の福取餅疝氣寸白あつき餅

尻餅鎗餅息子餅むくら餅銭餅

金餅を大将として都合其勢八百萬余騎

にて囲爐裏ヶ城に押寄て時の聲をそ

上に覺次に白粉の餅の郎等には正月

元三の粽餅二月卯の日の弓矢の餅三月

三日の菱切餅四月八日の薬師の餅五月

五日の菖蒲餅六月朔日齒堅め餅七月

七日の七夕餅八月十五夜御名月餅九月

九日菊の餅十月廿日恵比須講餅十一月

油絞餅十二月廿八日祝切餅家を作れば

ごし餅田地餅俵餅を始として都合其

勢五百萬余騎一ッ所に集りて時の聲同

音に合せんと爰に白粉の餅の郎等に

畑作の住人納豆の小太郎糸髭とて兵有

一昨日の昼間六糠屋の隅に昼寐して

居たりしか時の聲にて目を覚しかざく

もつくう起上り塩柄甲の緒をメて

小皿の駒に打乗て白箸兄弟引纏て

御前の馬場先にしんつくと乗出し

やあく爰元に進み出たる某は如何

成者と思やらん忝も畑作の住人納豆

の小太郎糸髭と云者也名有大將に出

合て勝負せんと這て入爰に白箸兄弟

是に有り迎進み出白粉の餅を挾取は小

太郎兼ての縄取なれば得たりや進めと縄

を懸六腹殿の御門番^ニ渡さる、門番の

者共誰々そ先前歯の孫治郎奥歯の

奥太郎舌の遠平杯は請取迄是を取て

は捻り合手を取てはむちり合四方八方

を引まわされ咽の細道踏分て六原城を指てぞ

急かる、城の内には五臓六腑迎其手勢数

多に責立られ是には中々叶わぬ次第也と山

伏姿に様を替法螺杯を鳴し其裏門

「四才

餅合戦状終

かも忍び出坪坂さして落さるゝ皆々感
せぬ者杜無り覺

「五才

(空白)

「六才

(空白)

「六才

「四才

「後見返

于時嘉永六癸丑年

正月上旬

「後表紙

「五才

【付記】 翻刻公開をご許可くださった徳田和夫先生にお礼申し上げます。